

QOL アンケートを用いた漁村再生に向けた取り組み

(株) 荒谷建設コンサルタント ○正会員 渡辺 修司
鳥取市 正会員 長谷川 幸彦
(株) 荒谷建設コンサルタント 正会員 川本 篤志
(有)シ・エ・イ 正会員 伊藤 則夫
香川大学 正会員 白木 渡

1. はじめに

漁村は、漁港を中心とする漁業の根拠地であると共に地域住民の生活の場であり、独特の漁民文化を展開させ、日本文化の多様性に貢献してきた。しかし近年、漁場環境の悪化、漁業資源の減少、魚価の低迷、高齢化及び燃油の高騰等による漁業の低迷等により地域全体の活力が低下する傾向にある。そこで、筆者らは漁村地域の再生に向けた取り組みへの端緒として、漁村住民の生活満足度を把握するための QOL (Quality of life:生活の質) アンケートを実施した。本論文では、このアンケートの分析を通じて地域住民の生活満足度の現状を明らかにし、合わせて生活満足度の向上に効果的な改善点の抽出を行う。

2. QOL アンケートの概要

対象とした地域は、鳥取市中心部から 30km ほど離れた少子高齢化・後継者不足等の社会的要因により地域活力が減衰傾向にある漁村である。

アンケートは 16 才以上の全住民を対象として実施した。アンケートの配布・回収に自治会の協力を得たことから回収は良好で計 181 名(男 75 名, 女 100 名, 性別不詳 6 名, 回収率 71%)の回答を得た。ただし、回答が記入されていない項目が少なくなく、設問ごとにばらつきがあり有効回答率は 36~91%程度であった。

本アンケートでは、生活の満足度が生活感、日常生活での充実感および安心感で構成されるものと考え、全 12 問の設問を設定した。このうち、問 1~4 は年代、性別、職業、家族構成を問うものである。各設問は、全体的な満足度とこれに影響を与える複数の構成要素に関する質問とした。

本論文では、アンケート設問のうち、生活感に関する設問である家庭・地域の暮らしについて分析した結果について述べることとする。家庭・地域の暮らしに関する設問は下記の通りである。

現在の〇〇地区での暮らしについてお聞きます。

- 1) 全体的にはどうでしょうか？
- 2) 普段使われる道路はどうですか。
- 3) バスや鉄道などの公共交通機関は利用しやすいですか。

- 4) 上下水道整備についてどうですか。
- 5) ゴミ処理についてどうですか。
- 6) 通勤・通学の便利さはどうですか。
- 7) 日用品や食料品などの買い物の便利さはいかがですか。
- 8) 病院や医療・福祉施設の利用しやすさはどうですか。
- 9) 近所間で会話や行き来などの交流はありますか。
- 10) 地域活動に参加されています。
- 11) 将来の〇〇地区の暮らしについてどうなと思いますか。

各設問に対して被験者から、満足(+2 点)~不満(-2 点)の 5 段階での評価を得た。

3. QOL アンケートの分析

地区の暮らしについての満足度の現状を年代別に調べると図 1 のようであった。

評価の傾向は年代にかかわらず同様に、全体に満足感度は低い。特に公共機関、通勤・通学、買い物、医療についての満足度が低い。学校や職場・店舗などが近くになるうえにそれらの施設に行くための交通手段もないことから、満足度の低い項目間の相関性が高く相互に関連していると考えられる。

一般的には、若年層の方がやや満足度が低いといえる。地域活動への参加は壮年代を中心として熱心であるが、若い世代では関心が非常に低いことがわかる。

各項目が全体的な満足度に及ぼす影響を調べるために、全体的な満足度である 1)および将来の暮らしへの見通しである 11)を目的変数、その他の各項目を説明変数として、重回帰分析による意識構造の定量化を行った。

重回帰分析では、式(1)で示すように目的変数(y)を k 個の説明変数($x_1, x_2, \dots, x_k$)の回帰式で定式化する。

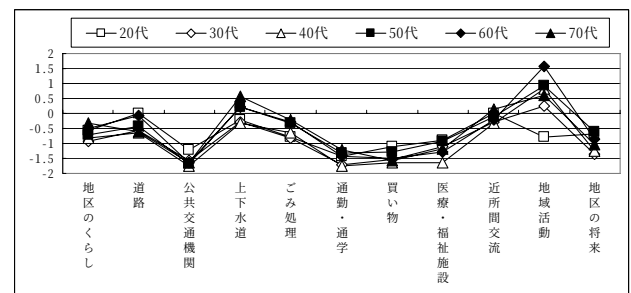


図 1 地区の暮らしの満足度の状況

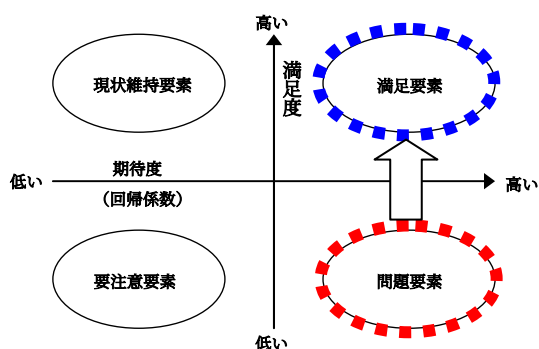


図2 満足度の構図

$$y = a_0 + b_1x_1 + b_2x_2 + \dots + b_kx_k \quad (1)$$

アンケートではすべての問に対して同じレンジで回答を求めているため回帰係数($b_1, b_2, \dots, b_k$)の大きさや符号はそのまま満足度に対する説明変数の各要素の影響の度合いを表していると考えられる。

目的変数である各要素の満足度を縦軸に、回帰係数を横軸にプロットすることによれば図2に示すような満足度の構図が得られる。なお、この図で横軸を期待度軸と呼ぶこととする。

図で下方にプロットされた要素は現状の満足度が低いものであり、右方にプロットされた要素は全体的な満足度に対して影響が大きいものと考えられる。従って図の第4象限にある要素を第1象限に押し上げるような方策が満足度の向上に対して最も効果的であるといえる。

図3には「現在の暮らし」と「将来の暮らし」を目的変数とした満足度に対する意識構造を一緒に示している。

図3を見ると、地域活動への参加、近所間の会話などは現在でも、そして将来的にも満足度は高い状態を維持しており、なおかつ期待度も大きくなっている。このことはこれらの要素が当該地区の大切な魅力要素であることを表している。

一方、地域生活上重要なライフラインである道路については、現在の暮らしでは満足度が低いものの期待度の高い要素であるが、将来の暮らしでは期待度が急激に下がっている。また、医療及び買い物については、現在の暮らしでは期待度はさほど高くないが、将来の暮らしでは期待度は非常に高くなっている。市街地以外の多くの地区と同様に当該地区でも日常生活において自家用車が重要な移動手段となっている。現在の生活では、自家用車の利用により自力で買い物や医療施設への移動を行なうため道路への期待度が大きいですが、将来は年齢が上がり、自力での移動が困難となることが予想されるため、

今後の交通・移動手段が大きな不安要素となっていることを表しているものと考えられる。

しかし、当該地区では、地域間交流に対する満足度、期待度が高いことから、地域ぐるみの取組により問題の解決を図るための土台は有していると言える。

よって、本分析結果より、当該地域の満足度の向上への1つの処方箋として、住民が主体となって地域で協力し合う仕組みの構築と将来的な交通手段の確保が重要と考えられる。

4. おわりに

本論文では、漁村を対象としたQOLアンケートについて紹介し、このアンケート設問のうち、家庭・地域の暮らしに関する設問について分析した結果を示し、地域生活における満足度向上のための1つの処方箋を示した。なお、本研究では、アンケート実施後に改めてワークショップを実施し、再度地域の現状・課題等をヒアリングした。結果は、アンケート調査と同様に公共交通機関の満足度の低さと、若者の地域離れに伴う将来の不安が最も多くあげられた。しかし、この浮き彫りとなった課題に対して「何とかしなければ」「自分たちに何が出来なのか」という前向きな意見も得られたことから、今後住民の満足度向上のための地域組織の構築をはじめ、具体的な方策の作成、住民主体による実践、評価をおこない地域に根付く活性化プランの構築に向けて研究を続けていきたいと考えている。

参考文献

- 1) M.ジョゼフ・サージー：QOL リサーチ・ハンドブック-マーケティングとクオリティ・オブ・ライフ-、同友館、2005
- 2) 長町三生：感性工学のおはなし、財団法人 日本規格協会、1995.7

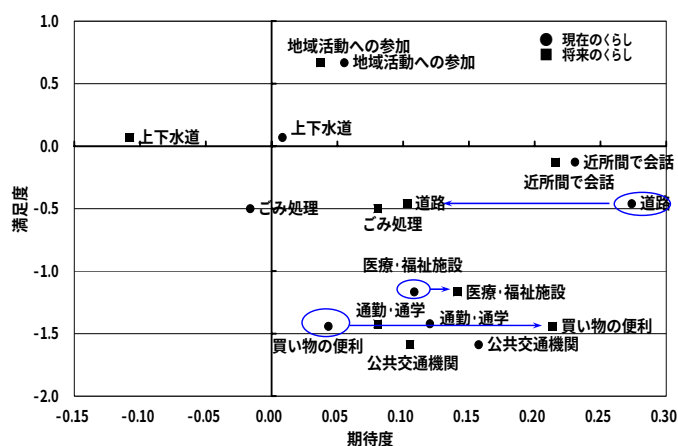


図3.満足度要因分析